栗ヶ崎高校の1.5つの日常

色梨 新人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
栗ヶ崎高校の１．５つの日常

【Ｎコード】
Ｎ１５４８Ｍ

【作者名】
色梨　新人

【あらすじ】
プリンが食べたくて食べたくてたまらない女子高生　日野見ナナ。
どうやってたべてやろうかしら？

火の無い所に煙を立てる（前書き）

やっと名前が決まりました～

火の無い所に煙を立てる

?通称木村プリン。購買部にて不定期に売り出されるプリン。購買にパンを卸しているベーカリー木村の夫婦の気が向いた時のみ購買に並ぶ。

?嫌らしくないサラリとした甘味をカラメルのほのかな苦味がさらに引き立てている。舌触りも滑らかで生徒内の極上スイーツとして大人気。

?ただし限定３０個ということもありなかなか手に入らない。

ーーーー

「ナナ、今日お昼どうする?」

授業も四限の終わりにさしかかりいつものメンバーからひそひそ声でお昼の打診がかかる。

「実はさ、今日は木村プリンが並ぶらしいんだ」

?日野見ナナも、ひそひそ声で返す。

「何で知ってるの？　あれ直前まで内緒じゃん」

?少し驚いた声は教師に聞こえたのかジロリと睨まれる。二人は視線を黒板に戻す。

「こんな事もあろうかと、今日まで購買のおばちゃんとは仲良くしてきたのさ」

?クツクツとイヤらしくナナは笑う。

「うーん、なんか狡っこいね」

「世の中上手く渡るにはこれくらい普通さ」

?素直な感想にひねくれた返答。

「この、教室から購買までかなり遠くない？　間に合うの？　」

「凄い走るから大丈夫だよ」

?親指を立てて答える。前の席から、「気をつけなよぉ」と声をか

けられる。
「それに、今日はちょっと行く所があるからさ、皆で食べてて」
「あ、部室に行くの？　」
「そういうことぉ」
?ナナは、手をヒラヒラさせながら答える。
「そっか、不堂先輩にヨロシクね」
?何でだろ？　と思いながら取り敢えず了解と合図する。
「あ、そういえばナナの部活ってさ・・」
?他の友人が声をかけるが、ナナは指を口に当て制止する。
「また、あとでね」
そう言ってウィンクひとつするとチャイムと同時に教室を飛び出す。
教師は、挨拶をと頭を抱えて日直に促した。

ーーーー

?ナナは、決して足がとてつもなく速い訳ではない。同学年平均と比べた場合平均より少し速い程度だろう。
?しかし、今のナナはとてつもなく速い、ように見えるのは理由がある。
?一つは目。ナナの動体視力、瞬間視、周辺視野等が発達しており最短距離を瞬時に判断できるから。
?二つ目。ナナのバランス感覚のおかげだ。とてつもないレベルでのバランス感覚が多少無理なルートを選択しても速度を落とさず回避する事が出来る。
?そういった訳で、ナナの接近に感づいてから目で追ったとしても見えるのは小さくなった頭部とその高い位地についたポニーテールだけだ。

犬も慣れれば棒を避ける

?ナナが最終コーナーを曲がった時点で、結構な人数が購買に並んでいた。
?出遅れた、とナナは思ったが足は止めない。最後の一個がなくなるまでは速度を緩めるつもりはない。そのまま群衆に突っ込むとプリンを探す。
?「あった！?」そういうと、左脚で踏み込む。しかし、次の瞬間誰かの手が伸びる。
「残念。これは私の物」
?おかっぱ頭の割北?真希が手を出したのだ。たまに、ナナと真希はプリンの取り合いを演じている。
「真希！?この前食べたでしょ！?」
?ナナは、そういうと右脚を踏みしめ左脚の指先をプリンの縁に引っ掛ける。
「今回は私に譲りなさい！?」
?そう言って、脚首の力だけでプリンを蹴り上げる。
?ほとんどの女の子達は、プリンの行方を、ほとんどの男達は、ナナの不可侵領域を見つめている。
?唯一、真希のみはプリンの行方も、当然スカートの中にも視線を置かない。
「相変わらずの足癖ね、はしたない」
?そう言って、今から跳ねようとするナナの右脚を左脚で踏みつける。
「跳ぶ跳ぶ兎、足をとられりゃどうするの」
?歌うような調子。安い挑発。しかし、プリンのせいで頭に血の上ったナナには十分だ。
「なぁめぇるなぁ～」
?ナナは、器用に右脚を上履から抜くと、お返しとばかりに左脚で

真希の右脚を踏み付ける。そして、その勢いのまま跳んだ。
?ナナが跳んだ事で自由になった真希も舌打ちひとつ打ちながら飛び上がる。

?いつのまにか購買の前は二人を囲むリングさながら輪が出来ている。大半は、何かを期待する男子と、二人の知り合いの女子だ。
「「これは、私のだ！？」」
?二人が同時に叫びもつれる。果たして、ナナの指先が僅かにプリンに触れるが、キャッチ叶わず落ちていく。
「痛っ！？」
?プリンが落ちた場所に運悪く位置取っていた女子が小さく叫ぶ。
「祐希、大丈夫か？？」
?一際背の高い女子、御田?未来が、一際背の低い女子、奈馬巳?祐希に声をかける。
「未来ちゃん、何か落ちてきたよ」
「あぁ、プリンが落ちてきたな」
?涙目の祐希に、冷静に声をかける。
「あ、ホントだ！？やったぁ！？」
?プリンを手に無邪気に喜ぶ祐希。顔から悲しげな表情は完全に抜けている。高校三年生なのだが、そんな雰囲気は全くない満開の笑顔だ。天才小学生で飛び級して高校にきている、という噂がまことしやかに囁かれているのも仕方がない。
「しかし、残念だが、あの二人が取り合いをしていたものだ。あの二人に返して来い」
?幸福から急転直下。祐希は、未来に言われた通り二人の元へトボトボと歩いていく。二人への道はモーゼの如く開いていく。というか、誰も彼もが涙目の祐希を見ていられなかったからだ。
「落ちて・・きました・・」
?そう言って、二人へプリンを差し出す。涙目だが無理矢理、笑顔を浮かべている。

「え？？あ・・」
？気まずい沈黙。痛い視線。ナナが隣を見ると真希も同じ気持ちのようだ。いつもの能面のような顔が引きつっている。
「わ、私はこの前頂いたからいりません」
？先に動いたのは真希だった。ニコリと笑うとそれじゃあ、とだけ言い残して逃げて行った。
「あ、ズルい！？」
？と、袖を掴もうとするも真希は人垣の向こうへ逃走後だ。
「あ、じゃあ」
？と、祐希がナナに渡そうとする。ナナは、目を瞑る。
「わ、私も、この前食べたんで・・後、ダイエット中だし」
？ナナは、この前いくら食べても太らないと自慢したばかりだ。
「え？？じゃあ・・」
「食べちゃって下さいいいい」
？悪役の去り際の台詞はだいたいが格好良くない。

二兎追って二兎捕まえる工夫をするのが人間

?はふぅと、大きな溜息を尽きながら部室のドアを開ける。ナナはまだ、プリンのショックが抜けきっていないようだ。

「どうした？　また、何か生えてきたのか？　」

?ナナの先輩にしてこの部屋の主、不堂勘久郎が声をかける。

「そんな毎回何か生えてきてたら人間辞めてますよ」

?一度でも十分辞めるに値するけどな、とつぶやく不堂を無視して部室の隅に置いてある植木鉢に近寄ると、ペットボトルで水をあげはじめる。植木鉢に植えられているのは観葉植物でもなければ根付きの花でもない。

「葱彦ぉ、たっぷり水を飲むんだよぉ」

?以前、ナナの頭に生えた葱だ。何故か男だと断定し葱彦と名前を付けて可愛がっている。

「前も言ったけどそのネギどうするんだよ・・」

?溜息混じりに不堂が尋ねる。

「どうするってここで育てますよ。ある意味私の血を分けた兄弟。いえ、息子ですからね。可愛がって当然です」

?胸を張って答える。オランウータンのお母さんの方がもう少し知能が高そうだ。

一寸先も二寸三寸先も闇

「なんですか？　この・・簀の子？　」
？ナナは、棚の端に見なれない木箱がある事に気が付いた。
？木箱と言っても下に僅かな隙間があるし脚立にするからにしては低い。そこから簀の子と想像するも奥行きがなさすぎるために、結果として疑問符がついた。
「んにゃ、違う。簀の子じゃなくて巣だよ」
？不堂はニヤリと笑うと覗いてみな、と促す。何があるのだろう？
と、ナナが覗くと光る眼、蠢く長い脚が八つ。
「ふぎゃあ！！　」
？慌てて顔を遠ざける。勢い余って机に後頭部をぶつけた。ついでに腰も抜かしたようだ。
「なぁにぃかぁがぁ　？いぃまぁひぃたぁ」
？慌てふためく余りに何を言いたいのか不堂には要領が掴めない。ただ、面白かったのは間違いなかったらしい。けらけらと笑う。
「単なるクモだよ、アシダカグモのクモハチ君だ」
？不堂は不堂で勝手に八人兄弟・・八匹兄弟だと決めつけて名前を付けたようだ。
「何でクモがここにいるんですか！！　」
？頭をさすりさすりながら腰をあげると文句の声もついでにあげる。
「ネギまのせいだよ」
？不堂は指差す。
「あんな天然ジゴロティーチャーと一緒にしないで下さい！　だいたい私ハーレム系漫画嫌いなんで」
？葱彦だとプンスカ怒るナナを無視して話しを続ける。
「そいつのせいでこの部屋に異変が起きたようなんだ」
？不堂は精一杯真面目な顔を作る。
「い、異変？　」

?どうやらナナにも伝わったのかナナも先ほどとうって変わって真面目な顔になる。
「あぁ、それに真っ先に気が付いたのがこのアシダカグモのクモハチ軍曹だ」
?不堂は、木箱、もといクモハチ軍曹の駐屯地を指差す。
「で、その異変ってなんですか？　」
?葱彦が引き起こした異変と言われたナナは険しい顔をさらにしかめる。不堂はこいつに真面目な顔は似合わないな～と思うが口にはしない。
「異変・・それは・・」
?不堂は、部屋を見わたす。
「ゴキブリがいる！！　」

前門の超古代戦闘生物、後門の戦略的決戦生物

「な、何だってぇ！！　」
「すいません、前回の引きから、開幕戦一発目がそれだと私のセリフっぽくて嫌なんですが」
？ナナはジトリと勘久郎を睨めつける。
「引き？　よくわからんが、まぁいいじゃないか」
「よくないです。ってか、ゴキブリがいるってマジですか？　」
？起き上がると、持ってきた弁当を頭の上に持ち上げ、キョロキョロと辺りを見回す。
「うむ、軍曹の主食はハエやゴキブリなど衛生面に問題のある虫とかだ。ハエを見かけた記憶はないし、ゴキブリがこの辺に寄って来たのを追ってきたと考えるべきだろうな」
「うー、ゴキブリがいるって思うとここでご飯食べるの嫌だな～」
「そうだな、基本的に食べカスなんかはゴキブリにとってご馳走でしかないからな」
？帰ろうかなぁと呟くナナを勘久郎は追い撃つ。
「んじゃ、今日は私戻りますね。先輩は、殺虫剤撒いといて下さい」
？先輩を顎で使う辺り大物である。そして、勘久郎はそんな大物っぷりを意に介さない。
「馬鹿者。軍曹に害が及ぶではないか！！　」
「いや、むしろそれ狙いです。一石二鳥じゃないですか。気持ち悪い生物が同時に消え失せるなんて」
？勘久郎は、頭を抱える。眉間には、数本の深い溝が掘られる。
「ナナよ。あぁ、ナナよ。なんと嘆かわしい」
？勘久郎は、ミュージカルぶった仰々しい芝居をうつ。
「君は、習わなかったのか？　人は見掛けで判断してはいけないと。君は、知らないのか？　機能美というものを」
？ナナは、『機能“び”』の発音が『機能“？ぃ”』に近かったこ

とに若干の苛立ちを募らせる。
「複眼持ちの多脚生物に関するモラルハザードなんて知ったこっちゃありません。どちらも気持ち悪いんです！　」
？勘久郎は、ふぅと溜息一つ、首をフリフリ、仕方ないといった芝居を打つ。
「わかった、わかった。しかし、ここで、殺虫剤を撒いたところでゴキブリにはあまり効果がないと思うぞ」
？？昆虫は脚が多いほど嫌なナナは不機嫌ＭＡＸでつっかかる。
「なんでですか！　よくＣＭやってる奴ならなんとかなりますって！　」
「恐らく、軍曹が常駐してる以上この部屋には現在ゴキブリはいないだろうからいなくなるのは軍曹のみだ。それに、ゴキブリは殺虫剤を撒いたら一定期間逃げてほとぼりが収まったころ帰ってくるぞ。ここは学校だ。逃げ場なんか腐って腐り落ちて腐海になるくらいあるぞ」
「何釈天で産湯をつかり、姓はぬめぬめ、名はゴキ次郎、人呼んでフーテンのゴキさんにございますってやつですか？　迷惑千万な奴です！　」
「その映画シリーズの人情味溢れる部分は嗚咽無くは見れんだろうな」
？眩暈や吐き気ばかりの映像に客は着くのか。勘久郎はＳＡＷシリーズとの相違点を探しつつ言葉を続ける。
「それに、ゴキブリは右頬を殴られたら左頬に防刃防弾防打防戦略核兵器まで装備するようなやつだ。生半可な事をすればそれ以上の脅威でこちらに襲いかかってくる」
？ナナは思わず口を覆う。
「そして、最大の難関それは・・」
「そ、それは・・？？　」
？勘久郎は、目を閉じると、一度息を整え、その後、ナナの疑問に答えた。

「掃除がめんどくさい。軍曹食べちゃうんだもん」
？ナナは、口の中が酸っぱくなるのを感じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1548m/

栗ヶ崎高校の1.5つの日常

2011年10月7日01時22分発行